

## 第II部

# 神道研究の現状と課題について



## I. 招聘研究者の紹介

3月15日に開催された国際シンポジウム「各国の神道研究の現状と課題」に先立って、今後の神道研究の課題、研究者の国際的ネットワーク形成に関する課題等について会議が行われた。

最初に司会より、シンポジウムの趣旨とこの会議の目的についての説明がなされた。ついで、参加者よりこれまでの研究の概要、神道研究との関わりを含めて、それぞれ簡単な自己紹介がなされた。最初に招聘研究者の自己紹介について、それぞれ簡単に紹介する(以下姓のみ、また敬称略とする)

【ブレーメン】1960年代にアムステルダム大学で文化人類学を始め、ライデン大学で日本学を学んだ。その後アメリカに渡ってカリフォルニア大学で日本学と文化人類学を学び、80年代に日本の陽明学に関する研究によって博士号を取った。その間に東京大学、名古屋大学で中国哲学を学び、やがて日本の民俗学の分野に関心をもったが、そうすると神道を学ぶ必要を感じ、最近、戦時下の日本の社会、そして日本の戦没者の慰霊祭、あるいは例えば地震とかで亡くなった人たちの慰霊祭の研究を始めた。

【ハーディカ】大学院生であったとき、シカゴ大学で宗教学を学んだが、博士論文を書くときに、東大の宗教学研究室に所属した。そのときに今日出席している井上順孝氏や関一敏氏など日本の宗教学者に出会うことになった。また職に就いてからの研究休暇の際に、国学院大学でも1年間研究をする機会があった。そのときは、明治維新後の大教宣布運動を中心に研究し、その後、国家神道、また教派神道の黒住教の研究も行った。

【マセ】最初は歴史を勉強していたが、フランスの場合、歴史を勉強するというのは西洋の歴史である。それをやめて日本語を勉強しようと思った。歴史を研究していたときは、「ローマ古代の宗教について」という論文を書いた。その後、京都大学の宗教学科に入り、日本の古墳時代から飛鳥時代までの葬送儀礼についての論文を書いた。しばらく松山の愛媛大学で教えていたが、フランスに帰って東洋言語文化研究所に所属した。「日本思想を読もう」というコーナーの責任者になっている。

神道については、最初は宗教学的に神道の死に対する扱い方を知りたいと思った。そのために、葬送儀礼に関することを研究テーマに選んだ。また神話に興味があつて『古事記』について研究した。最近、江戸時代の神道にも関心があるが、朝廷と神道の関係、正親町神道とかもやりたいと思っている。

【李】韓国の大学で西洋史ではなくて東洋史を研究した。その後日本に来て、東京外大の日本語学科で学んだ。大学院は一橋大学に行き、民衆思想史をやっていたら安丸良夫氏のところで、モラルジーについて研究し、教育勅語の思想との関係を研究した。さら

に、民衆思想を研究しようと、博士論文では天理教を扱い、東大で学位を得た。

韓国に帰ってから、自分の国では細かいことを研究していても通じないとわかり、近代日韓関係の中で天理教や金光教のような教派神道運動が、どんな意味を持ったのかを扱った。神道研究は韓国社会ではどうしても国家神道、そして国家神道のイデオロギー性を告発するということに集中していたので、もう少し教派神道が持っている日韓関係史の意味を扱うことによって、オリジナリティを出そうと考えている。

【シャイド】ウィーン大学で博士論文を書いてから、ウィーン科学アカデミーの東洋学研究所に勤めているが、研究所は大学と直接の関係はなく、研究リサーチのみを行っている。最初は、ウィーン大学で民俗学を勉強したが、その後、日本研究に移行してからは日本の思想史に興味を強く持った。とくに 1990 年代に早稲田大学に留学してから神道思想史、そして神道の一般の歴史について興味を抱いた。そのときは、菅原信海氏のもとに、1 年半、研究生として留学した。

その後、科学アカデミーでとくに吉田神道について研究した。それについての論文は去年発表した。これが、自分にとって神道についての最初の論文である。その後、マーク・テーウェンと一緒に、神道についての論文も集めて『Japanese Journal of Religious Studies』という雑誌に発表した。将来は、とくに中世から近世までの神道の発展について研究したい。とくに、吉田神道がどのように普及し、江戸時代には影響をもったのかについて、思想的かつ社会史的な視点から研究したいと考えている。

## II. 国内研究者の紹介

招聘研究者の自己紹介に続いて、国内から招待した 4 人の研究者が、同様に、自分の研究領域、現在の関心等をふくめて、簡単な自己紹介を行った。以下にそれぞれの紹介の概要を示す。

【櫻井】もともと、『風土記』の研究をしていたが、その後皇学館大学の神道研究所に勤め、このときに原田敏明氏と出会った。それで村の宗教に非常に関心を持ち、近代になって村の氏神がどのように変わっていったのかといった研究を行った。とくに神社整理とか神社合併について研究をしていた。10 年ほど研究所で過ごした後、神道学科で神主さんたちを育てる立場にあった。

そして今から 6 年前に新たに開設された皇学館大学の社会福祉学部で、神道と社会福祉の関係を研究している。基本的には日本の地域社会や、とくに伝統的な村の研究を、1 つの大きなフィールドとしている。

【関】5 年前から九州大学に移った。神道には最近関心を深めている。現在対馬の「赤米

の行事」という全国的に有名な行事がある。これがなくなりかけているので、数年がかりで調査しようと思っている。同時に大きなテーマを抱えていて、それは幕末維新期にキリスト教的な宗教像というものが日本に入り、言葉としても定着していく中で、神道的なものがどう形成されたかという問題。これが国家神道の問題や、戦後折口信夫が神道を「未成立の宗教」という言い方をしたことともつながる。

神道は、何か丸い筒のようなもので、そこに仏教や儒教や陰陽道が入ってくるというような捉え方はまずいのではないか。もう少し違う角度から神道をとらえてみたい。

**【田島】**麗澤大学で学んだ後、上智大学の社会学科に編入し、そこでウィーン大学のヨゼフ・クライナー氏と一緒に南西諸島を研究した。そのとき安斎伸氏と出会った。その後ずっと奄美大島の1つの村で調査をしている。今は3つの関心をもっている。

1つは、その村からのいわゆる都市移住者における宗教変容、民間信仰が都市に出てくるようになってどう変容していったのかという問題。同時におもしろい現象が起こっているが、それは逆に都市移住者が村に帰ることによって村の民間信仰を変えていくという現象である。そういった両方の面に興味を持っている。

2つは、韓国の済州島からの日本への移住者が2世、3世、4世となっているが、そういう人たちに関心をもっている。3つは、日本人の宗教意識。シンクレティズムを全然不思議に思わない日本人の宗教意識。いまの若い人たちが全然宗教的なものに関係ないのかというと、そうではない。そういったものを失わないのはなぜなのか。それを井上氏と一



緒に宗教教育との絡み合いで研究している。

**【対馬】** 専攻としては学部的时候は経済学で、それから社会学になった。今は宗教社会学を研究している。日本の近代以降の宗教、とくに新宗教を中心として、これまで研究を続けてきた。神道系に限らず仏教系その他も含めて広く研究してきて、そこに共通性があるのかどうかといったことを考えてきた。

最初のころは主に救済思想を中心に比較研究してきたが、その後、個人の救済、救いから社会全体の救いをどう考えているかに関心を抱いた。大本教などに代表される千年王国思想というものを検討した。さらに、その周辺の非常に小規模の教団を研究している。最近では教団宗教ではない、もう少し広い日本人の宗教行動、宗教習俗といったものにも関心を持っている。

招待した研究者の自己紹介に続いて、シンポジウムの実行委員であるノルマン・ヘイヴンス (Norman Havens)、矢野秀武、レヴィ・ミクロークリン (Levi McLaughlin)、稲場圭信、日平勝也の各氏、そして準備にたずさわった黒崎浩行、遠藤潤、平藤喜久子の各氏が、このCOEプログラムとこのプロジェクトに、どのようにかかわっているかを中心に自己紹介を行った。

その後、司会者が 21 世紀COEプログラムの趣旨、そして国学院大学のプログラムが目指していることについて、招聘研究者、及び招待研究者に対して説明がなされた。そして、今回のシンポジウムが、「神道・日本文化の情報発信と現状の研究」というサブテーマのもとで実施されたこと、国学院大学日本文化研究所編『神道事典』の英訳が同時に進行していることなども説明された。シンポジウムは神道研究者の国際的ネットワーク形成を目指すものであることも強調された。

### Ⅲ. 今後のテーマと研究視点

参加の自己紹介が終了したのち、今回の国際シンポジウムのやり方と目的について、また今後も連続して行うことになっているので、それに当たってはどのような長期的視点が必要かといった点について、自由な意見交換がなされた。それぞれの関心に基づいた多様な意見が提起されたが、以下、議論の概要について示しておく。

**【マセ】** 神道研究は、国際的なものにならないといけない。それから、世界中の宗教の中で、神道がどのような位置になるのかということをやすべきだ。もう 1 つは、表現は難しいが、日本人のアイデンティティと神道との関わりについても研究すべきだ。

**【ブレーメン】** 『神道事典』を翻訳しているということだが、その際、用語をどう考えるか

がとても大事だ。神道専用の用語がある。また一般的な日本語としても使うものがある。そして宗教学とか民俗学でも使っている用語がある。つまりこの3つのレベルの概念を通して神道を理解しようということが必要ではないか。

【井上】 これまでは、そのような分け方をとくには意図していなかった。日本文化研究所が開設しているホームページ上では、日本語の研究書や研究論文を英訳してオンラインで読めるようにしてある。これらについてのグロッサリーを作成中である。そのときには、基本的には学術的観点からの専門用語として翻訳するということを、もっぱら念頭に置いてきた。

【ヘイヴンズ】 実際に、『神道事典』の「神」という巻を訳したときに非常に躊躇したことがあったが、結局、とりあえずの訳を使う場合が多い。100%統一できない言葉もある。たとえば「神」という言葉に deity をつねに対応させるというわけにはいかない。だから、それを覚悟してとにかく1つの実際上の問題として、訳語の後に括弧して日本語を入れるという手段をとることも考えられる。

具体的な例として、最近「タマ」という言葉についての質問が出た。soul はキリスト教的ではないですかと言われることもある。anima とか numen とかいろいろな可能性がある。例えば、numen にすると、一般の人は全くわからなくなる。文章の中でタマは numen 「のようなものである」といったような説明の文章としていいと思うが、numen すなわち「タマ」というふうにはできない。

【ハーディカ】 この問題に関連して、最近、東大の史料編纂所で「ヒストリー&メモリー」というプロジェクトがあって、歴史学において同じような問題に直面している。

【ヘイヴンズ】 いままで神道関係の用語がどういうふうに使われていたか、それが集約されていると非常に役に立つ。

【櫻井】 翻訳の問題については、現代日本は非常に変化が激しいので、その変容の中でどう訳していくかが大きな課題になる。かつて私が『神道事典』の中の「村落祭祀」という項目を依頼されて書いたときの例を一つあげたい。実はこうした項目はいままで的事典ではなかったもので、最初に定義をしようとした。そこで思いがけず難しい問題に直面することになった。

「村落」を、民俗学のほうではよく片仮名で「ムラ」と書く。漢字で「村」と書くと行政的な村だが、ここで言う「村落」は行政的な村ではない。この民俗学でいう「ムラ」というものをどのように適切に表現できるかずっと悩んだ。また、「ムラ」は家の連合だというとらえ方もあるが、そうすると、「家」という言葉が、また人によって違ったとらえ方があるということになる。

そういう経験をもつ者からすると、「村落の祭祀」はどう翻訳されるのか、そういう興味がある。

【井上】『神道事典』の翻訳に当たって、最近専用のサーバーを設置し、そこにこのプロジェクトに関係している人専用の掲示板を設けた。この掲示板の上に翻訳者からの質問を書き込んでもらい、それに対して日本側のアシスト者たちが回答を書くというシステムを作り上げた。どの訳語がいいかという問題だけでなく、もともとの意味が不明な場合も質疑応答が可能となる。

この掲示板は、今のところ翻訳上をスムーズに進めるために使っているわけだが、これをもう少し発展させていけば、今議論になっているような、1つの用語、概念に関する議論を国内外でともにやれる可能性がある。

過去にどのような訳語が用いられたかも非常に重要だが、他方でいま櫻井氏が指摘したように、日本で使う用語自体もどんどん変わってきているという点も考慮せねばならない。とくに現代社会は社会自体のテンポが速いので、変わり方も速い。タマか魂かということにしても、そのニュアンス自体が日本において変わってしまうことがある。したがって、そうしたことをリアルタイムで議論できるようなシステムが、翻訳に付随させる形でできたらおもしろいかなと考えている。このプロジェクトが本格化したら、近代的なツールを使って、古典的な問題を解決する、そういう手段を模索したい。

【ハーディカ】今回のシンポジウムには、一般の研究者も参加すると聞いているが、こうした研究者と私たちメンバーとの継続的なつながりを予定しているのかどうか。

【井上】出席者は、神道、日本文化の研究者と学生というのが一応の資格になっている。その中には、このプロジェクトに継続的に関わって欲しい、ネットワークを形成したいという人たちも混じっている。

【シャイド】具体的に「神道」そのものについての議論も必要ではないか。私自身は黒田俊雄の神道についての説に関心がある。そういうテーマでの議論するというようなことは考えているのか。

【井上】今挙げられたテーマは、神道は果たしてある種の内実を伴った連続性を持ったものとしてとらえられるのか、あるいはそれこそ容れ物であって、その中にいろいろなものが入ってきて構成されるものであるというふうにとらえるのがいいのか、そうした議論と関連すると考えられる。そこまで極端に分ける必要はなくとも、神道の歴史的連続性というようなテーマは、なかなかおもしろいと考えている。

個人的には、神道を1つの「宗教システム」としてとらえているが、その中核にはいわゆる神祇制度というものがある。神祇制度は古代から今日に至るまで、あらわれ方は違う

けれども一回も途絶えたことがないといえる。そういう意味で、やはり神道はたんなる筒ではないだろう。ただ、それをずっとつないでいくあり方が、確かに時代ごとに変わる。その変わり方がどの程度ドラスティックなものであったのか、というのは非常に興味を持っているので、今のようなテーマはぜひ早い時期に設けたい。

【シャイド】COEの研究プロジェクトの中には、「神道データベース」の計画もあると聞いたので、それについて質問したい。そのデータベースの内容はどのようなものなのか。神道関係の研究書か、現象か。文献のデータベースの場合、日本語だけのデータベースとなるのか。

【井上】データベースに関しては、まだ研究の態勢が十分には整っていない。計画としては、現在の神道系団体のデータベース。もう一つは研究文献目録のデータベースがある。これは日本文化研究所でこれまでつくってきた『神道論文総目録』、『続神道論文総目録』、『和学者総覧』、『神道人物研究文献目録』、こうしたものの蓄積の上に、さらにアップデートして電子化を目指している。

データベースについては、現在のところ英訳の予定はない。日本語を読める人を対象にしている。

【ブレーメン】これからのテーマに関してだが、ヨーロッパでは神道というと、あまり死と関わりが深くないという捉え方もある。つまり、仏教は死の宗教、神道は生の宗教、大体そういう簡単な理解の仕方が一般的である。しかし、実際には神葬祭もあるわけだから、そうした今まであまり扱われてこなかった側面を取り上げていくということも大事だと考える。日本ではそういう必要はないかもしれないが。

【井上】日本人の間でも、そういうイメージはかなり強い。神葬祭があるということを知らない人もいる。圧倒的多数は仏教なので、これに関連したテーマだと、日本文化研究所編で『神葬祭資料集成』がペリかん社から平成7(1995)年に刊行されている。また、ここ数年の間に大部の『神葬祭事典』が2冊刊行されている。その中では、神社神道と教派神道のそれぞれの神葬祭のやり方が解説されている。神葬祭への関心は若干増えていると言えるかもしれない。

【李】いまの葬儀の方法を含めて、例えば社会福祉の世界では、死を迎える準備の問題として自分の生と死をどう意味づけるか。キリスト教や仏教ではこういう意味づけがあるけれども、神道の場合はどういう意味づけがあるのか。一方では、そういう問いかけがなされることもある。神道と死についての関心といったものも、出てきているのではないかと。

それから、次のテーマということで提案したいことがある。神道を自分の主専攻にする人というのは、日本以外の国においては、そんなにいないと思う。したがって、海外の研



研究者を呼んで、日本の研究者たちと議論するときには、あまり込み入ったテーマにしないほうがいい。

たとえば、各々の国における日本学のなかで神道研究が持っている意義とか、それが今後どういう展開をされるのかという展望とか、そういったテーマがやりやすい。

**【シャイド】** それは、今回のシンポジウムのテーマと共通点が多い。

**【李】** だから、とりあえず現状紹介をして、その次は一步進めるという感じになろう。

**【井上】** シャイドさんが今言ったことの趣旨は、神道研究はそれぞれの国で盛んではない。アメリカは例外かもしれないが……。そうすると、もともと日本研究の中で神道研究ということになってしまう。そういう意味で今回との重なり度が強くなるのではないかということだと解釈できる。

**【ハーディカ】** アメリカには神道関係の研究者はいるにはいるが、自分が神道研究をやっているのだという意識を持つ人はだれもいないと思う。そういうことからすると、神道研究が学問的にどのような貢献できるのかということが、よりはっきりしてくればよいなと思う。韓国では、自分が神道研究をやっていると思う人はいるのだろうか。

**【李】** 広い意味では神道、例えば、金光教とか天理教のような教派神道あるいは新宗教という枠組みの中で研究する人はいるが、そういう人たちには神道研究をしているという認識はない。神道研究を通して日本文化を理解するという、そういう問題意識を持っている人がだれもいない。

むしろ、先ほどのマセさんの指摘にあったように、日本人のアイデンティティと神道、つまり神道を通して日本人の文化的深層を見ようとする研究、そういう神道研究が日本文化理解にどんな意義を持っているかをまず明らかにするということが一步前進になる。

**【シャイド】** それは「神道学の可能性」ということになる。

**【ヘイヴンズ】** アメリカだと、一般的に民間信仰が日本宗教だというふうには、考えている人が多いと思う。その中で神道的なもの、あるいは神祇制度とか神についての扱い方とか、そうしたテーマで研究する人もいるが、しかし、これらは神道研究と名づけるほどにはなっていない。

**【ブレーメン】** オランダで『万葉集』を翻訳する者は、神道研究者とは言われないが、神道に関する知識は必要だ。あるいは、能を研究している人も同様である。神道という言い方がされない分野の中にも神道の知識が多い学者はいる。そういう人たちも含めてい

どうか。

【井上】そうした人たちも含めないとおもしろくない。ただ問題は、そうした広い意味の日本学と神道学とをどういう関係でとらえるかという先ほどの問題に戻る。仏教学とかイスラム学とか、成立宗教と呼ばれているような宗教を中心にした研究分野は、それぞれの宗教の歴史がある程度はつきりしているから研究のスタンスも決めやすい。しかし神道の場合はそもそも神道がいつ始まったのかとか、神道の中核は何かというようなことに関しての了解がほとんどないままに、日本でもいろいろな研究がなされているという現状がある。

したがって、ある時期の日本の宗教史は神道というものを想定しなくても説明できるという立場もあったりする。また、神道や日本文化を着せ替え人形的な比喻でとらえ、本質は同じで、少しずつ違う装いで出てきているだけだという見解もあったりする。

そういう議論からは一歩でも二歩でも進んでいきたい。国内の研究者を見ていると、神道研究というのはどうしても細分化されていて、文書の解読とか、ひとつひとつの神社資料を探していくといった細かい作業をする人もいる。こうした研究はむろん必要なわけだが、「神道」という言葉が一体何を意味し、それが日本文化の中でどのような位置になるのかという肝心な議論は、なかなか本格的に展開されていない。

こうした大きな問題は、日本人の研究だけでやるより、むしろ国外の研究者の目からさまざまな視点を提起してもらったほうが面白くなるのではないか。あまりに日常的に観察



されることは、かえって重要な点を見逃すこともある。そういう観点も、今回のプログラムには導入してある。

**【櫻井】** この議論はとても興味深い。例えば、先ほどの能の研究をしたときに神道の知識も要るということだが、その場合の神道の知識というのは何が想定されるのか。そういうことを具体的に出していけば、何が神道研究なのかについての議論が共通にできる。

**【井上】** いくつか重要なテーマが提起されたので、今後のシンポジウムを考えるに当たってぜひ参考にしたい。

COEのプログラムでも、さらにいろいろ考えて、いまのご意見を全面的にはなくてもかなりの部分を吸収できるようなテーマを設定したいと思っている。

#### IV. 若手研究者育成をめざして

このCOEプログラムは若手研究者を育成するというのも重要な目的の一つである。そこで、神道研究の若手研究者の立場に立てば、どのようなことが必要かについての意見交換を行った。すでに国学院大学ではハーバード大学と協定を結んで学術交流を行っている。こうしたものをさらに広げていくことが求められるので、これに関して、いろいろな観点から意見を述べてもらった。

**【李】** この点については非常に関心があるので、提案というかお願いをしたい。私の所属する大学（東西大学校）では、日本の主に精神文化を中心にした教育を、大学院の修士課程と博士課程で発足させた。韓国においては、こういった枠でやるのは初めてである。日本の精神文化に関するものを扱うと、一番教えにくいのが神道に関する教育である。15週間のサイクルに合わせて教育できるプログラムがなかなか難しい。

若者を教育するには、充実した教育プログラムが必要で、そこにはビデオとか視聴覚教材も含めたほうがいい。そういう教育プログラムは国学院大学を中心にして作成してもらえば、国際的に利用可能になる。

**【ブレーメン】** 教育ビデオは、一つ危ない点がある。教育よりはエンターテインメントになる可能性がある。個人的には反対だが、しかし同時に非常にいい考えとも感じる。

**【井上】** 危ない点というのは、作り手の問題が大きいと思う。あらゆるビデオが危険となると、視聴覚教育は成り立たなくなる。だれがどんな意図でつくった教材かということ。それに対するある意味の信頼関係が重要ではないか。相互に信頼の置けるような、また学術的な視点として耐え得るものを目指すということなら、こうした企画を進めていくこと

は、いっこうに構わないと思う。

【ハーディカ】アメリカの場合だと、日本の仏教関係と神道関係の研究を比較した場合は、仏教のほうが全然レベルが上である。したがって、仏教研究の歴史を見ると大切なヒントがある。いままでは日本仏教関係の研究者が何人かアメリカに長期滞在してアメリカの大学で教えて学生や院生の指導したり、資料を紹介したりした。日本の拠点的な研究機関の橋渡しになったことで、研究が展開した。したがって、もし外国で若手研究者を育成しようと思う場合は、日本から何人かの神道研究者を派遣するということが望ましい。

【井上】これはもっともなご意見と感ずるが、仏教研究者と神道研究者には、まず量的な違いが大きい。圧倒的に仏教研究者の数が多く、また仏教系の大学は数多いが、神道系の大学は2つしかない。こういう状況のもとでは、なかなか国外に研究者を派遣する余裕がないということもある。しかし、今後は国外で教えるシステムを考える必要が増すと思う。

それから、今回の企画は、外国の研究者に日本の研究に目を向けてもらうと同時に、国内の神道研究者も、海外の研究動向にもっと目を向けてもらうことも意図している。限られたサークルの中で議論をしているのではだめな時代になっているので、次の世代にはこの点をぜひ強調したいと考えている。

若手研究者の育成、それから拠点間のネットワークに関しては、一番いいのは直接的な交流であるが、メディアの発達した時代なので、ネット上のフォーラムのようなものを時々開いて、そこにそれぞれの国の若手研究者に参加してもらって議論をするというシステムも考えられる。

その場合、まず使用言語が問題になる。今回のプログラムは日本語で行うということになっているので、参加者は一応日本語が使える環境にして、うまく日本語で説明できない部分は英語でというような現実的対応をとれば実現性があるのではないか。

若い世代は、通常の情報交換をネット上で行い、ときどき「オフ会」をやるといった行動形態をとる。ネット上での交流が日常的で、非日常的な交流として「オフ会」がある。こうした思考法というか行動パターンというのは、学術交流のレベルでも一部導入したら面白いのではないかと考えている。日常的なコミュニケーションをネット上で実施して、年に1回とか2回国際的なオフ会を開いて、議論を煮詰めるといったような形式も考えられるであろう。

簡単なのは、掲示板の利用だが、これは誰もがアクセスできるようにしておくとうらさられるなどの問題がおこる。パスワードを設定し拠点校の関係者はパスワードを共有し、若手研究者はそのパスワードで使って掲示板にはいり、議論をするというようなシステムができれば、あるいは、実際になかなか人が行けないという現状をいくらかでも補うことができると思う。

【ハーディカ】とてもいいアイデアだと思う。若い人ほどネットに詳しいし、違和感が

全然ない。語学の面も似たような現象があつて、若い人ほど日本語を早く覚えるから、日本語の環境のネットフォーラムでもいいのではないか。

【ハイヴズ】すでに神社ネットがあるし、神主同士で雑談もやっている。英語でのネットも実際にやっているところがある。

【井上】もちろんフォーラム自体はすでにあるが、各国の神道研究の拠点校が連携をしてやるというスタイルはまだないと思う。

【ハイブンス】それぞれの大学の教育プログラムに組み込んで、そのクラスにおいて、ある問題をネット上に取り上げようという設定があればいいかもしれない。

【井上】神道研究者というのは国内的にも国外的にもかなり限られているので、そうした新しいメディアを十分に使って補うというのは、他の分野に比べてもいっそう必要ではないか。事典の英訳に際して作成した掲示板を発展させて、ある時期からそうした試みも考えたい。

【関】『神道事典』の英訳というのは大変な仕事で、かつ意味がある。それ自体が、比較宗教学的な実践だろうと思う。ただ、それを日本の若手研究者が読まなければ、日本の神道学は育たない。何か、そういうシステムを教育システムとして考えたほうがいい。

例えば、「国体」というのを英語にすると「nationality」か「national character」である。それは誤訳に近いというか、それではカバーし切れないのはわかるが、6割ぐらいは合っている。6割が合っていれば、それでもう大体いいのではないか。19世紀に刊行された *The Sacred Books of the East* は、かなり乱暴ではある。しかし、それによって何かが開く。レベルで言えば、あれは3割程度の仕事ではないかと思う。だから、6割程度でいいから、ある地平さえ開いておけば、それを今度は日本側の若手が読むとか、それからさらに日本語のできる海外の人がそれを読んでもう一度それを叩き合うとか、将来に投げかけるような最初の日平にすればいい。

去年フォークロア関係の語彙集をつくったときに、一度英語に訳してみようと試みた。そうすると、すごく楽になった。たとえば、「米」という主題を書いた者が、「米は日本の主食か」という問いにとらわれていたけれども、もっと深い問があつた。「主食」は日本語以外になり得るかどうか、主食という考え方はどうもない。そうすると、米が主食だという議論以前に、主食という考え自体が何か文化的なものだとなる。そういうふうに議論が、日本語では閉ざされるものが、誤訳を含めてでもいいから容易に開けるところがある。

【井上】6割でいいというような場合、具体的にはどんなふうにするのか。

【関】訳す人たちは、もちろん、9割から9割5分主義を目指すと思う。でも、我々が実際に使うときは、専門家でも8割ぐらいしか精度は要求していない。ましてや、若い研究者だったら5割を超えればいいと思う。それを誤解とは言わないでいい。誤解というのは10年、20年、これと同じことを思い込んでいるのを誤解という。

【マクロークリン】誤解というよりも、解釈が違うということにならないか。

【関】解釈の問題というのはあると思う。でも、多分、神道学や国学が抱えている問題はそれ以前の問題である。そういう精度を要求していなくて、その手前だと思う。

【井上】まず1つは翻訳のレベルの話、もう1つは日本人の研究者に積極的にそれをやれという話として理解すればいいのか。

【関】そういうことだ。

【井上】翻訳の水準を云々というのは、スピードの問題なのか。同じ期間で55%の精度と95%の精度のものが仮にできたとすると……。

【関】もちろん、翻訳は95%のほうがいいに決まっているわけである。精密度が高いこと自体が問題なのではなくて、例えば「国体」を「nationality」と言ってしまったときに、4割ぐらいずれているだろう。その4割のことを言っている。そうやってしまうことによって、日本固有のものでも何でもありはしないというのがまず頭にくる。にもかかわらず、日本に特殊なものがあれば何かというふうに一度比較の地平を通ることになる。これをやらないと、国学も国語学も民俗学も再生産が効かなくなると考えている。

【井上】たとえば、「お神輿」を「portable shrine」と訳したことに對して、神道関係者から疑問が出されたりするという現実があるわけだが……。

【関】「portable shrine」は名訳だ。これはもう8割を超えている。

【井上】それでは不満だという神道学者がいる。そうすると、なぜ不満なのか。それでは、何と言えればいいのかという議論が起る。そうなってくると、これがいま関氏が言ったようなことにも一部つながってくるということか。

【関】一部はそうである。

【井上】お神輿が「portable shrine」と訳されているのだと知って、「それでいいのか？」

というふうに思い、その気持ちから出発する研究が若手研究者の場合にはありうる。それ以外に例えばどんなプロセスを関氏は想定しているのか。

**【関】**早い話が自分の頭の訓練である。若手研究者がほかの学問分野と、違う言語を内語、母語としている人たちと会話をするための訓練というもの。本当に基礎的にそういう話である。だから、英語ができるようになれとかそんなことではない。そういう、「えっ？」というときの驚きとイデオロギーが連動してしまう癖が、我々には身体化されている。若い人たちがまだ身体化されていないうちに、それを投げ込んでいくということがどうしてもいま必要ではないか。

**【井上】**最後になかなか根本的な提言をいただいた。出席者の方々に、いろいろ貴重なご意見をたまわったことに感謝したい。今後の研究にぜひこの議論を活かしていきたい。

概略以上のような議論が活発に交わされた。内容はきわめて実質的なものであり、率直な意見が述べられたことにより、いくつかの課題も浮き彫りになった。今後の拠点形成の具体的方針や次回以降のシンポジウムの内容にも有益な示唆が得られるものであった。

(文責 井上順孝)

21 世紀COEプログラム

21st Century Center of Excellence Program

神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成

Establishment of a National Learning Institute for the Dissemination  
of Research on Shinto and Japanese Culture

---

---

神道・日本文化研究国際シンポジウム (第1回)

各国における神道研究の現状と課題

---

---

平成15(2003)年9月30日発行

編集発行者 國學院大學21世紀COEプログラム

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學

印刷製本 株式会社 美術センター